2015年（平成27年）4月18日（土）大分合同新聞

CLTパネルを使った「まちなか案内所」＝17日、大分市

県内の政治・経済

【報道部】
政治班　097-538-9622
経済班　097-538-9623
FAX共通　097-538-9673

木材の新素材

「CLT」活用へ着々

九州初 公共建築物に

木材需要の創出が期待される建築の新素材「CLT（直交集成板）」の活用が県内で始まった。大分市のJR大分駅ビルの開業に合わせて、素材のPRも兼ねた建築物が駅周辺に相次いで登場。建築、設計、行政などの組織でつくる推進協議会も立ち上がった。木材需要が減少する一方で伐採期を迎えた木は増えており、県産材の復活に寄与できるか注目される。

県は3月に大分駅の北口付近に実証棟としてバス停を整備。九州で初めてのCLTを使った公共建築物という。県内の技術者を育成する研修の場として、設置作業時には30社、45人を招いた。7枚のパネルを組み合わせ、基本的にボルトで接合する工法で、計約3時間で完成した。

九州で唯一、パネルを製造する山佐木材（鹿児島県）の村田忠取締役製造部長は「多くの木を使い、組み立て式のため工期は短くなる。バス停の現場には木材関連の川上から川下まで幅広い分野の人が集まり、大分の関心の高さを感じた」。設計した1級建築士の伊藤憲吾さん（大分市）は「さまざまな場所で使える可能性がある」としている。

16日にはCLT素材を使った「まちなか案内所」が大分駅前にオープン。内外装は木を生かしたデザインで、縦横に板を組み合わせたCLTの特徴が見た目で分かる。

推進協議会は昨年発足した研究会を格上げする形で3月に発足した。大分大学や関係団体など計45組織が所属。今後、県内で低層階（3階以下）の建物を建設する予定があり、建築物で本格的に利用できるようになる来年度の法整備を見据えて、ノウハウの蓄積や情報収集につなげる。

県林産振興室は「県外では大手の業者が多い中で、大分は中小の企業も多く関わっている。豊富な森林資源を有効活用して林業者の所得向上も期待でき、法改正に合わせてスムーズに導入できる環境にしておきたい」としている。

（江藤嘉寿）

CLTを利用して建設したバス停と工法などを確認する関係者。パネルを組み立てるだけのため工期が大幅に短縮できる＝3月

CLT

クロス・ラミネーティッド・ティンバーの略。板の繊維方向が直交するように重ねて接着した厚型パネル。欧州ではCLTを使った木造9階建てが建設されている。国内では2013年に日本農林規格（JAS）の建築部材に認められた。